



## 【いちご（ハウス高設土耕栽培）】

### ①栽培こよみ

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
作型	親株○ - - - - 太郎苗○ - - - - - ◆ - - - - ○											
ハウス高設	■											

○：定植    ■：収穫    ◆：切り離し    - - -：育苗期間    —：本圃期間

### ②栽培のあらまし

#### (1) 育苗

育苗は、雨よけパイプハウス等の育苗ハウス内に設置した育苗ベンチの上で、地面（土壌）から離れた状態で行います。ハウス内外の地面には防草シート等を敷設（雑草対策・泥はね対策）し、育苗ベンチの高さは70cm、幅150cm（センターに親株を配置し両サイドに9cmポット用24穴トレイを配置）、過湿等による生育ムラを防ぐために水平になるよう設置します。灌水は専用チューブを使用した株元への灌水とします。

3月中下旬に元母株となる親株を種苗会社から購入して大型ポットに1株定植し、活着後IB化成を1株あたり6粒程度施用します（その後約1ヶ月ごとに同量施用します）。4月以降ランナー子株の発生に伴い順次、ポットに受け始め、乾燥したら十分灌水し発根を促します。確保した太郎苗を5月中旬に1プランター当たり3株定植し、活着後IB化成を1株あたり5粒程度施用します。十分な灌水と1週間に1回程度の液肥施用（500倍）を行い、この太郎苗親株1株から25本のランナー子株を確保することを目標に管理します。均一な灌水と土の跳ね上がり防止のために、点滴チューブを使用し午前中に灌水を行います。

均一な良質苗を確保するため、7月中下旬頃から一斉に受けポット作業（窒素肥料の含まれていない育苗土を充填した9cmポット）を行います。ランナー子株が倒れないよう、専用資材で固定し、24穴トレイに並べた後十分灌水します。8月上旬に切り離し作業を実施します。切り離し作業もできるだけ一斉に行い、揃った苗を確保します。

切り離し後は、夕方には土の表面が乾く程度の灌水を励行します。施肥は切り離し1週間後に1ポットあたりIB化成2粒を施用し、その後は約10日おきに500倍希釈の液肥を施用します。葉かきは展開葉が3枚程度になるように行い、同時に病害虫の持ち込みをなくすために、農薬のローテーション散布を行い、定植時は5葉程度の苗に仕上げます。

## (2) 定植

株間は20cmの千鳥植えとし、花芽分化を確認した後、十分灌水した培地(表1)へ根鉢と培地の間に隙間ができないようしっかり押さえ、クラウン部が培地に沈み込まないように定植します(9月中下旬)。培地は複数年使用するため、あらかじめ7~8月中旬までに太陽熱消毒を行っておきます。

表1 培地配合割合		表2 生育ステージ別給液量と濃度		
種類	配合割合	生育ステージ	給液量(ml)	EC(mS/cm)
真砂土	27%	定植準備	100~150	0.5~0.6
くん炭	25%	定植後~活着	70~100	0.5~0.6
ココピート	18%	活着後~収穫始	70~150	0.6~0.7
パーライト	15%	収穫中~1月	100~150	0.7~0.8
ピートモス	15%	2月~3月中旬	100~150	0.6~0.7
微量元素	FTEを0.017g/l	3月中旬~	150~200	0.4~0.5
苦土石灰	pHを5.9~6.2に調整	5月中旬~	200~300	0.3~0.4

## (3) 定植後の管理

定植直後は十分手灌水して発根を促した後、点滴灌水チューブ(10cmピッチ、16cc/株/分)を株元に配置します。肥料は市販の専用肥料を使用し、1,500倍~2,500倍の培養液を作成し、表2を目安に微調整し施用します(基本3分×3回)。定植直後は急な濃度変化を与えると新葉にチップバーンを起こしやすいので注意します。廃液量は給液量の25%程度を目安とします。マルチング(白黒マルチ)は10月中旬頃から行い、開花の4~5日前を確認した後、あらかじめ用意しておいた交配用ミツバチを導入します。

暖房施設は最低夜温7°Cで稼働するように設定し、自動換気装置は最高気温28°Cに設定します。厳寒期は16時頃には内張りを被覆して保温を開始するとともに、架台にカーテンをはかせ培地温度を確保します。一方、温度が上昇する春以降は、日焼け果や種浮き果が発生するので、11時~15時頃まで遮光資材で遮光します。

草勢管理は原則1芽仕立てで、それ以降は2~3芽仕立てにします。頂花房の果数は7~10果とし、えき花房以降は5~7果を残すように摘果します。摘葉については古葉や老化葉は随時摘葉していきませんが、3月以降は病害虫対策も兼ねて早めに摘葉を行います。

電照は草勢維持のため12月上旬から18時~24時まで10分間欠で行い、生育を確認しながら2月中下旬までに打ち切ります。

## ③病害虫防除

病害虫防除は天敵(ミヤコカブリダニ等)・微生物農薬を積極的に導入します。

## ④栽培上の留意点

- ・適期、適切作業の励行。